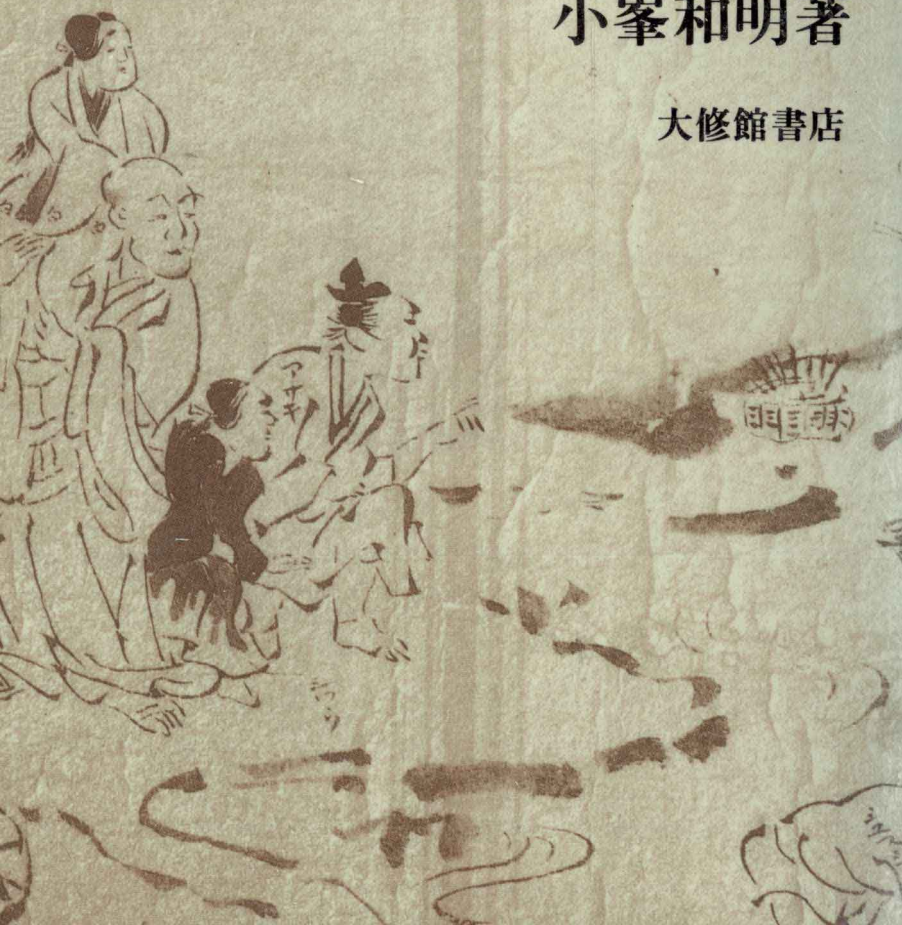


森の説話

天狗・盗賊・異形の道化

小峯和明著

大修館書店



説話の森

天狗・盗賊・異形の道化

小峯和明著

大修館書店

著者紹介

小峯 和明 (こみね かずあき)

1947 年、静岡県熱海市生れ。1977 年、早稲田大学大学院博士課程修了。文学博士。古代・中世説話専攻。現在、国文学研究資料館助教授。

著書 『今昔物語集の形成と構造』(笠間書院)、
『今昔物語集・宇治拾遺物語』(〈新潮古典文学アルバム〉新潮社)、
『今昔物語集 上・下』(共著・ほるぷ出版)他。

カバー 『今昔物語絵巻』(国立国会図書館蔵)

説話の森

天狗・盗賊・異形の道化

© K. Komine 1991

1991 年 5 月 10 日 初版発行

定価 2,200 円
(本体 2,136 円・税 64 円)

著 者 小 峯 和 明

発行者 鈴 木 荘 夫

発行所 株式 大 修 館 書 店
会 社

(101) 東京都千代田区神田錦町 3-24

電話 03-3295-6231(販売部) / 03-3294-2356 (編集部)

印刷・製本 / 図書印刷

ISBN 4-469-22079-5 Printed in Japan

話の森

天狗・盗賊・異形の道化

目次

I 説話の森

- 天竺から来た天狗 「大豆の僧正」考 2
怨霊から愛の亡者へ 位争い伝承の変転 23

II 説話の誕生

- 猿を救った獅子 説法の庭 58
蟬丸の琵琶 密室の対座 84
則光と髭の男 二人の語り手 112

III 説話の深層

- 女盗人二題 京の闇 140
昇らなかつた龍 伝承ともどき 164
炎を見る男 絵巻の説話 187

IV 説話の風景

きのこの不思議 説話の本草学 212

動物たちの声 鳥獣戯画と芸能 235

西洋から来た説話 イソップと聖者伝 256

V 説話の中世

雑談の時代 説話の表現史 282

使用テキスト一覧 306

あながき 310

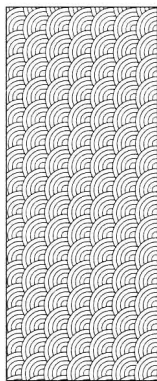
人名地名索引 317

書名索引 320

装丁 ● 山崎 登

I

説話の森



天竺から来た天狗

——「大豆の僧正」考



説話への旅

説話とは何か。説話にふれるたび、昔と今が不思議に交錯し、現実を激しくゆさぶるエネルギーに撃たれる。たんに過去にひき戻されるだけでなく、過去から反転してさらに未来をも巻きこむような躍動感に襲われる。小説や虚構の物語とはまた一味違う、断面をえぐる切り口の鋭さが説話にはある。

説話が活性化され文芸の域に達するのは、中世であつたという。しかし古代はもとより、その後の近世や近代にも説話は創造され続けた。現代でも同じであろう。説話を語ったり聞いたたり、書き読む営みは宮々と続いている。

短歌が千年を越えた文芸の様式であるように、説話もまた時代をつらぬく形態としてある。にもかかわらず、中世が説話の時代と呼ばれるほど、意義をもったのはなぜだろう。それは宗教とも深くかわるが、まさに時代が説話

*中世 ここていう中世はひろく古代末の院政期（十二世紀）から戦国桃山のキリシタン時代（十六世紀）までをさす。公家・摂関家・武家・寺社勢力などが拮抗しあう権門体制の確立から崩壊への時代に当たる。

という形を必要としたからだ。説話はいわば世界を認識する思考の枠組みであり、説話を通して人々は現実の混沌と向きあい、みずからの存在を見つめることができたのである。

ことに時代の転換期における価値観の変転、社会体制の動揺や世相の不安、あいつぐ争乱の渦中であつて、人々はあるべき世や人生の指針、処世の知恵をこぞつて求める。生死の苦悩に正面から取り組み、救いの道を模索し、いかに生きるかを真摯に問ひかけた仏教がひろく信仰を集め、浸透していく。

そういう仏の教えや仏道の勧めをはじめ、処世の道をわかりやすく説き、生き方を教えたとしたのが説話である。社会の要請から、また社会への積極的なはたらきかけを意図して、さまざまな説話と説話集^{*}が作り出された。人々に訴えるには、印象が鮮烈で心の琴線にふれるものがよい。わかりやすく、おもしろいものがよい。実利的、実用的でありつつ、またそれゆえに人間存在の機微にふれた、表現の磨かれた説話が生み出されていく。

説話の文芸とは、そのように獲得されるのであろう。だから今も現実にもそのまま突き刺さってくる衝撃をもちえているのだ。我々が現代に生きながら、時空を交差させて中世の混沌にひきこまれていくのもそのためだ。

説話はどうすればおもしろく読めるか。説話を読むとは、いいかえれば中世を読むことでもある。中世の説話にはそれ特有の読み方があるはずで、近

^{*}説話集 個々の説話を何らかの目的によつて部類、編纂したテキストをいう（聞書・抜書の類も含む）。古代の『日本霊異記』にはじまり、中世末の天草本イソツブなど、さらには近世にも及ぶが、質量ともに充実したのが中世である。

代の小説などと同じように読んでいいものか、おおいに疑つてみる必要がある。小説や虚構の物語と違って、一編の説話をひもとくことは、それだけで完結しない重層的な読み方を必要とする。一つの説話は別の説話を呼びおこし、それがまたあらたな説話をたぐり寄せ、さまざまにからみあい、うねりあう。何か得体の知れない森にさまよいこみ、はてしもない濁流の渦に身を引きこまれるような、もだしがたい想いにとらわれる。

説話は、文字にならない奥深さを常に背後に背負っている。その見えない世界をいかに透視するかが説話の読み方だともいえる。深層にかかえこまれた世界を通して、はじめて説話は真の姿を顯す。文字の世界は氷山の一角にすぎない。説話の深層をさぐっていくと、あちこちで見えないはずの地底の岩盤が不意に突出したり、断層の亀裂をふとかいま見せたり、まったく思いもよらぬ地平に連れていかれる。知の冒険を縦横に楽しませてくれる。それが説話の醍醐味だ。説話は物語の一種ではあるが、より現実や日常に深く刺しこんだ衝迫性をおびているのではないか。

しばらくは、未知の扉から深遠な時空に踏みこみ、混沌の渦に躍りこんで、説話への旅を試みてみたい。

まずは天狗にのつて想像の翼をひろげてみよう。
法文は海を越えて

『*今昔物語集』には、はるばる天竺*てんじくから日本まで飛んで

*『今昔物語集』 院政期の初期、十二世紀の前半になる説話集の大作。三十一巻。一千話以上もの話を体系的に編纂。天竺から震旦、本朝にいたる説話の集大成をめざす。作者未詳。

*天竺 インド世界の呼称。古代は五天竺に分かれていた。

*震旦 中国の古い呼称。インドで秦をチーナ・スターナと呼んだことによる。「支那」の名称も同様。

*諸行無常是生滅法 『涅槃經』などにみえる有名な偈。

すべてのものは生成流転をくり返し、その流れを断ち切つてとらわれのない悟りの境地に達することをうたう。

*比叡山 京都の東北にある山名だが、普通は最澄が開いた延暦寺を意味する。

*横川 延暦寺は東塔・西塔・横川の三塔からなる。一番奥まった地にある。

*四天王 持国天・増長天・

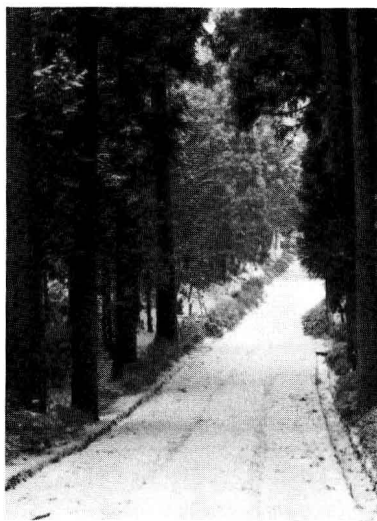
来た天狗の物語がある。

天狗は天竺から震旦への道筋で、「諸行無常、是生滅法」云々の有名な法文が海の水一筋に鳴り響いているのを耳にし、その源を尋ねて害をなそうとする。水音は中国までも響いており、ついに日本の境の海、今という東シナ海を渡り、博多、門司、瀬戸内海を経て、淀川から宇治川をさかのぼって琵琶湖に入り、比叡山の横川までやって来る。

たどりついたのは僧が使う廁。ますます法文の音はかまびすしく、四天王や護法童子の護衛も厳しく、それ以上近寄れない。なかでも最も劣

った天童におそろおそろ尋ねると、ここは学問する僧が使う廁であり、それゆえ川の水まで法文を唱えているのだという。廁の水までかくもすばらしい法文を唱えるのなら、さぞかし山の僧たちは貴いだろうと、ついに天狗は一念発起し、比叡山の僧として生まれ変わることを誓って姿を消す。

はたして天狗は宇多法皇の孫、兵部卿有明親王の子として再生し、明救という僧正になる。延昌僧正の弟子、浄土寺の僧正とも、



冬の比叡山、横川

広目天・毘沙門天（多聞天）がそれぞれ東南西北に位置して仏を守護する。

*護法童子 仏法の守護神で童子の姿をしたもの。

*宇多法皇 光孝天皇の皇子。親政をよくし、退位後に仁和寺を開き、御室と呼ばれる。

九三一年没。

*兵部卿有明親王 醍醐天皇の皇子。兵部省の長官。九六一年没。

「大豆の僧正」とも呼ばれたという。

(卷二〇第二)

天狗は仏法に対して害をなす魔物である。その天狗が天竺から日本の仏法をやつつけるために比叡山まで来るが、最後は法文の尊さにうたれ、信心にめざめて高僧に再生する。その意外性がこの物語の核である。はるかかなたの天竺からやって来て日本で生まれ変わるという着想自体、今の眼からすると奇抜であり、再生へのあこがれや期待にみちている。話のテーマは、天狗という仏敵を改心させて逆に信奉者となし、比叡山の仏法の威力をみせつけることにある。天狗はそのひきたて役にすぎない。ほとんど道化役に近い。

『今昔物語集』は卷二一〇にこのような天狗譚を多く集めており、この話は巻頭に位置する。次の話は震旦から来た天狗がやはり比叡山の僧に撃退される話で、中世には『※是害坊がいはうえま繪卷』という繪卷まで作られる有名な話である。いずれも、比叡山の仏法を喧伝するにふさわしい話題だ。比叡山の延暦寺は天台宗の総本山、京都の東北にあつて国家を守護する意義をもっていた。

天狗が来たルートは当時の海上交通の道筋にあたる。空の飛行にもかかわらず、海上の道を来たところに、この時代の交通が問わず語りに示されている。古代や中世の交通路が天狗の眼を通して俯瞰され、映し出される。音を便りに水系をたどる、そのはてが比叡山の廁であつた。

廁は最も聖域から遠ざかった、俗世界に近い場であり、聖と俗の境界にあ

*『是害坊繪卷』 鎌倉後期に作られた繪卷。『天狗草紙』とならび、天狗を中心に描いた繪卷として知られる。
*延暦寺 伝教大師最澄が開いた寺で、平安京の守護として鬼門に当たる東北部の比叡山に建つ。古代・中世を通じて日本仏教の中樞をなした。
*天台宗 最澄が中国から伝えた仏教の宗派。顕教と密教を兼ねた総合性をもつ。

る。天狗はかろうじてこの境界にたどりつき、最も俗に近い程度の低い天童から水音のいわれを聞くことができた。もちろんこれら結界を守護する天童らの姿は普通の人には見えず、異類の天狗だからこそ見えるわけだが、廁までしか行けないところに、劣悪な魔物としての天狗の位置がよく出ている。

天狗と廁の結びつきは、^{＊おえのまさふき}大江匡房の『^{＊ぞくほんらんちゅうおうじようでん}続本朝往生伝』^{＊へんじよう}遍昭伝に、調伏され炉壇に焼かれた天狗の灰が廁に置かれて息を吹き返す話などにうかがえる。妖怪の天狗と廁には、聖界から遠いけがれの雰囲気がつきまとう。

廁の水音という低いものを出して、より次元の高い法文や靈験の力を想像させるのは、説教などでよく使われる語り方である。読者の想像力を刺激するたくみな方法であった。

物語をつらぬく「諸行無常」の法音の響きはどうだ。^{＊しやうみよう}声明の響きが水音となつて日本はおろか海外にまで鳴り響く。海の水一筋に鳴る法文。宇宙全体まで法悦にいざなう、この世のすべてが^{＊ふしやう}仏性を象徴する、大乘の精神を体現している。これが中世に理想とされた音、幻の音だ、といってよい。天狗はその音に吸い寄せられるようにやつて来る。仏法を伝えた中国にまで逆に響くところに、文化的な劣等感に根ざした発想がうかがえる。優越の誇示はしばしば劣等感の裏返しにすぎず、劣等意識をくつがえすために構想されたものであらう。

＊大江匡房 院政期を代表する文学者。一一一年没。故実や学問、詩歌にも長じ、実務官僚としても有能だったが、晩年自閉的になり、遊女や芸能に関する特異な作を残した。
＊『続本朝往生伝』『日本往生極楽記』につぐ第二の往生伝。院政期の往生伝輩出の先駆け。一一〇二年頃。
＊声明 經文に節をつけて唱える儀礼にまつわる仏教音楽。

天狗が天竺・震旦・本朝とたどった道は、そのまま仏法が伝わった道でもあった。仏法を迫害すべき天狗もまた同じルートをとってやってくる。仏法が日本に根づいたように、天狗もまた反仏法の使者から信奉者に転じて日本に根をおろす。仏法の威力は裏側から支えられ、安泰となる。天狗の使者によって、仏法伝来は名実ともに完成したかのようだ。

それにしても、なぜ再生した人物が明救だったのか。「大豆の僧正」とは何を意味するのか。『今昔物語集』だけにらんでいても、謎は解けそうにない。

位争いの物語

手がかりは意外にも『平家物語』にあった。まったく思いがけない別系の説話の糸からたぐり寄せられてきたのだ。その

思わぬ糸とは、^{*これたか}惟喬・^{これひと}惟仁親王の皇位争いをめぐる一連の説話であった。

ずばり結論からいえば、「大豆の僧正」の由来は、この両親王の皇位争いの後日譚として長門本の『平家物語』にみえる。『平家物語』には異本が多いが、大きく語り本と読み本に区別される。後者の読み本を代表するテキストが長門本である。読み本ではほかに延慶本と^{*えんきょう}源平盛衰記^{*げんへいじょうすい}が知られるが、この話はなぜか長門本にしかみえない。

寿永二年（一一八三）、源義仲が信州から怒濤のごとく都に攻め寄せ、平家一門は西国に落ちる。平氏滅亡の序章で名高い都落ちの段である。この時、

*^{惟喬・惟仁親王} 文徳天皇の皇子。第四子の惟仁がわずかに九歳で即位して清和天皇になり、惟喬は出家して隠棲。

*^{長門本} 下関の赤間神宮に伝わる読み本系の代表的なテキスト。全二十巻。

*^{延慶本} 読み本系を代表するテキスト。延慶年間に紀州根来寺で書かれた。十二冊。

*^{源平盛衰記} 読み本系の最も増補されたテキスト。四十八巻。成立は中世後期に下る。

*^{源義仲} 木曾で挙兵し、平家を都から追放、朝日將軍と呼ばれるが、頼朝に敗れ、悲壮な最後をとげる。一一八四年没。

わずか八歳の安徳天皇も母建礼門院徳子らの道づれになり、都は天皇不在という異常事態が発生する。王の不在は古代社会にとって最大の危機であり、やむなく三種の神器もないまま四宮を即位させる。のちの後鳥羽院である。

東の源氏、西の平家という対立はもとより、都と西国に天皇がならびあう緊迫した事態を前に、人々は過去いくたびにもわたる王権の危機的状况を思いおこしていたらしい。そこで呼びおこされたのが、文徳天皇の王子、惟喬と惟仁兄弟の位争いの物語であつた。

親王惟喬の母は紀氏の三国町、祖父は紀名虎。紀氏の名門である。一方、惟仁の母は染殿后、祖父は藤原良房。藤原氏のなかで最も勢力をもつ北家の出自。文徳天皇は惟喬を寵愛していたが、良房の圧力により、生後わずか八か月の惟仁を皇太子とし、九歳で即位させる。のちの清和天皇であり、良房は最初の摂政となる。藤原氏が天皇の外祖父として摂政や関白になって政治の中枢を担う、以後の摂関体制の布石となる。天皇が誰になるかは、その後ろ楯を誰が担うかという政治権力の機構そのものにかかり、文化のあり方を決定づける。

清和天皇の即位により、紀氏は没落、藤原氏北家の天下となる。古代の転換を象徴する事件として人々に衝撃を与えたらしく、両親王の位争いの形でさまざまな伝承をはぐくんできていく。その代表が『平家物語』の「名虎」の段

*安徳天皇 高倉院の皇子。壇浦で平家一門とともに死ぬ。一一八五年没。脱出して山里に隠れる平家伝説が各地に伝わる。

*建礼門院徳子 平清盛の娘で高倉院の後。安徳天皇の母壇浦で助けられ、出家して大原で一門の菩提を弔う。没年未詳。

*後鳥羽院 高倉院皇子。後白河院の孫。鎌倉幕府と対決するが、承久の乱で敗れ、隠岐に流され、一二三九年没。

*文徳天皇 仁明天皇の皇子。藤原良房の政治に翻弄される。八五八年没。

*染殿后 良房の娘明子。文徳天皇の後。染殿は良房の邸。藤原良房 冬嗣の子。承和の変で文徳を即位させ、さらに孫の清和を天皇にして摂政となる。八七二年没。

である。今、長門本によってみよう。

位争いは十番の競馬と相撲によって競われ、高僧の祈禱による験くらべが行われた。惟喬側は東寺長者、柿本の紀僧正真濟。惟仁側は比叡山西塔、平等坊の惠亮和尚。競馬は続けて四番、惟喬側が勝ち、相撲も惟喬方の六十人力の名虎が敵方の能雄に対して圧倒的な優勢。あやうしと見た比叡山の惠亮は法具の独鈷で自分の脳を碎いて護摩壇にくべる。と、絵像の大威徳明王の水牛が雄叫びをあげ、その威力で競馬は一気に六番勝って逆転。相撲も小兵の能雄に威力がついて名虎が負け、惟仁側の勝利に終わる。

位争いが真言と天台という宗派の対決の様相を呈している。名虎は惟喬の外祖父であるが、名前の印象から相撲取りの名に使われたのだろう。能雄はおそらく応天門の変で失脚する伴大納言善男と関連があらう。『平家物語』の語り本では、相撲だけがより緊迫した劇的な場面に仕立てられている。宮中の年中行事である相撲や競馬が、呪的な占いの意義をもつことがうかがえ、相撲と競馬の勝敗が密教の修法によってクライマックスを迎える巧みな展開である。相撲や競馬の描き方はテキストによって異なるが、験くらべの対決は一定している。劇的な物語の結末がながく人々の心をとらえ続けたのだらう。

*東寺 弘法大師空海が建立した平安京の南端の大事。高野山とならび真言密教の拠点。

*柿本の紀僧正真濟 柿本は出身にかかわると思われるが未詳。紀氏の出で空海の高弟。

*西塔 比叡山延暦寺の三塔の一。東塔について勢力拡張をはかった。釈迦堂、法華堂、常行堂が有名。

*平等坊の惠亮和尚 平等坊は西塔の坊名。惠亮は西塔初代の院主。円仁の高弟。

*大威徳明王 六面六足の憤怒の形相で水牛に乗る守護神。怨敵調伏を目的として礼拝。

*伴大納言善男 佐渡の下層身分から身を起こして大納言にまでいたるが、応天門の変で失脚。伊豆に流され、八六年没。

ことに「惠亮^{えりやう}碎腦^{さいのう}」の成語まで生む壮絶な修法が印象に残る。天台の法験をたたえるのに最もかなった説話であり、尊意^{*尊意}僧正が道真^{*道真}の霊や将門^{*将門}を調伏する「尊意智劍^{そんいちけん}」「振劍^{しんけん}」(とも)の説話と対照される。王権の危機を救ったのは仏法の駿力^{げりき}であり、まさしく仏法が王法を支える、仏法・王法相依^{ぶつぽうあひゆき}の理念を象徴する話となっている。仏法は強大な寺社勢力、王法は宮廷を頂点とする国家権力をさす。これが対等に支えあい、互いに依存しあつて社会の秩序を保つのが理想とされた。現実はそのにほど遠かつたが、すくなくとも中世をつらぬいてその理念はうたわれ続けたのである。

王の誕生や即位を左右する力として仏法は期待されていた。それは大嘗会とは別に、教団が天皇の即位をつかさどる天台の即位法^{*即位法}などの儀礼にも典型的だが、寺院の喧伝^{けんでん}だけではない、俗世の権力を相対化し、超越するもののへの熱い期待の地平に支えられている。この説話がそうした理念にもとづいて構想されていることは間違いない。

『平家物語』でこの話が呼び出される根本の理由もそこにあり、兄の安徳天皇をさしおいた弟の後鳥羽院即位の正当化として位置づけられる。また『曾我物語』では、同じ話を冒頭にすえて清和源氏の起源を語り、頼朝を登場させる。いわば、源氏の神話としての意味を与えている。

そこで問題になるのが位争いの敗者真済だ。敗れた者は怨霊として後日譚

*尊意僧正 天台座主。九四〇年没。円仁の系統であるが、寺門派とも目される。

*道真の霊 菅原道真が大宰府に左遷されて没後に怨霊になり、天神として祀られる。

*将門 平将門。承平天慶の乱で関東に乱を起こして平定される。『将門記』に詳しい。

九四〇年没。

*仏法・王法相依 仏法が鎮護国家として従属するだけでなく、王権と対等に支えあつて国家が成りたつという理念。
*即位法 天台宗をはじめ、教団で行われた天皇の即位をつかさどる灌頂の儀礼。

*『曾我物語』 鎌倉幕府の権力抗争を背景にした曾我兄弟の仇討ち物語。室町時代。語り物としてひろまる。